

森林におけるシカの給餌誘引条件の探索

- 森林におけるシカによる被害は、林業への直接的な被害だけでなく森林生態系にも深刻な影響を及ぼしている。
- 被害軽減のために、従来の捕獲方法に加えて個体数管理を目的とした様々な捕獲技術が開発されており、効率的な捕獲を可能にすることが期待されている。また、これらの技術は給餌による誘引を利用するものが多い。
- そこで、本研究では給餌による誘引効果に影響する要因として、シカ生息密度および餌資源量との関連を検討した。

- (1)シカ生息密度と誘引効果との関連
場所:高知県内5地区(生息密度2.0~32.9頭/km²)
期間:2016年1月(冬) ↑平成25年度モニタリング調査(高知県)
- (2)異なる地区における餌資源量と誘引効果の比較
場所:徳島県つるぎ町剪宇および成谷の2地区
期間:2015年7月(夏)・10月(秋)・2016年1月(冬)
- (3)同じ地区の植生の違いによる餌資源量と誘引効果の比較
場所:高知県中土佐町1地区
期間:2015年7月(夏)、10月(秋)

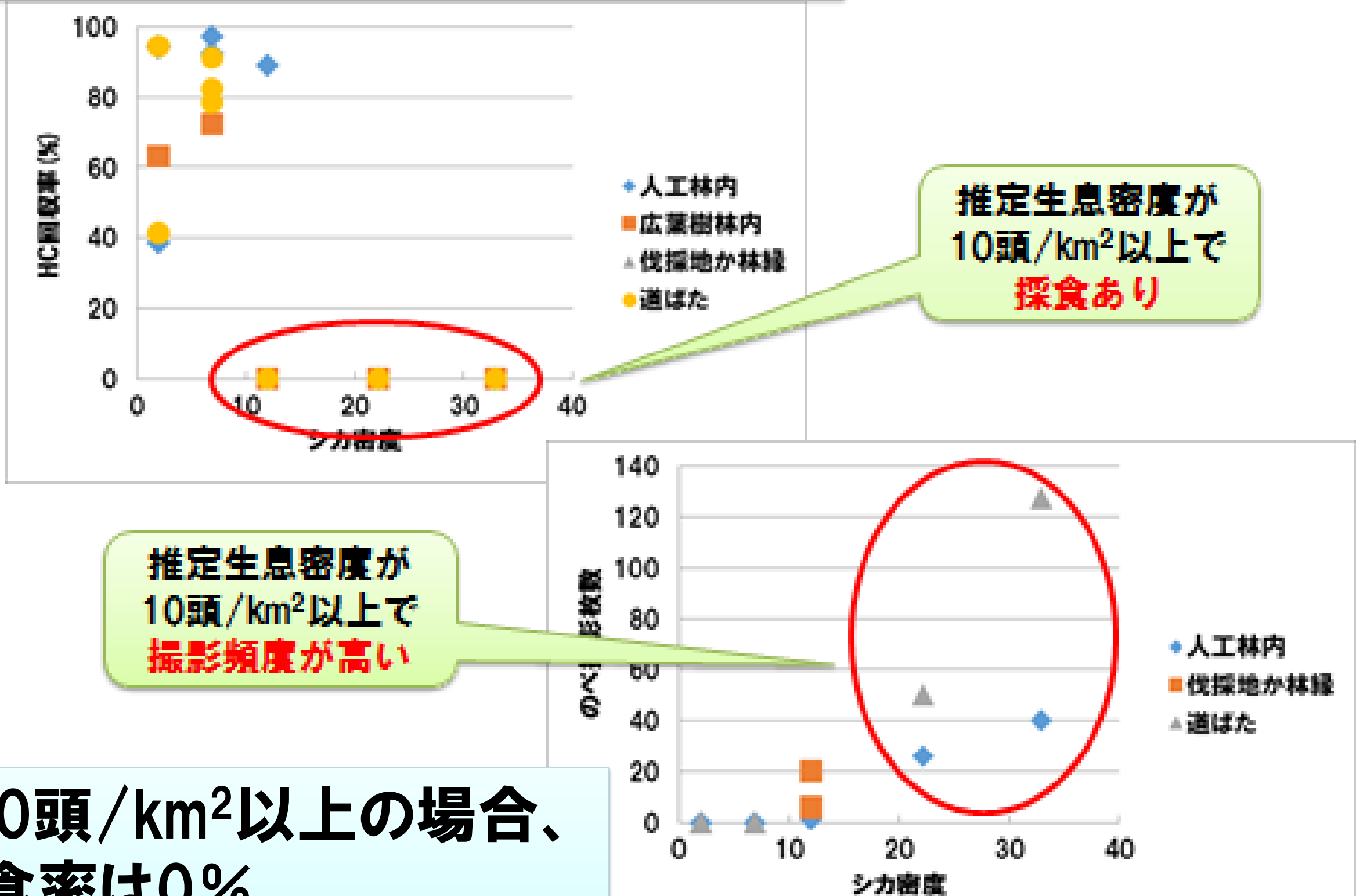
- ✓植物現存量調査:下層植物を刈取し、乾物重量測定
- ✓誘引調査:給餌場にセンサーカメラを設置
ヘイキューブを500g置き、2週間後に回収



給餌誘引を利用した捕獲実施の検討

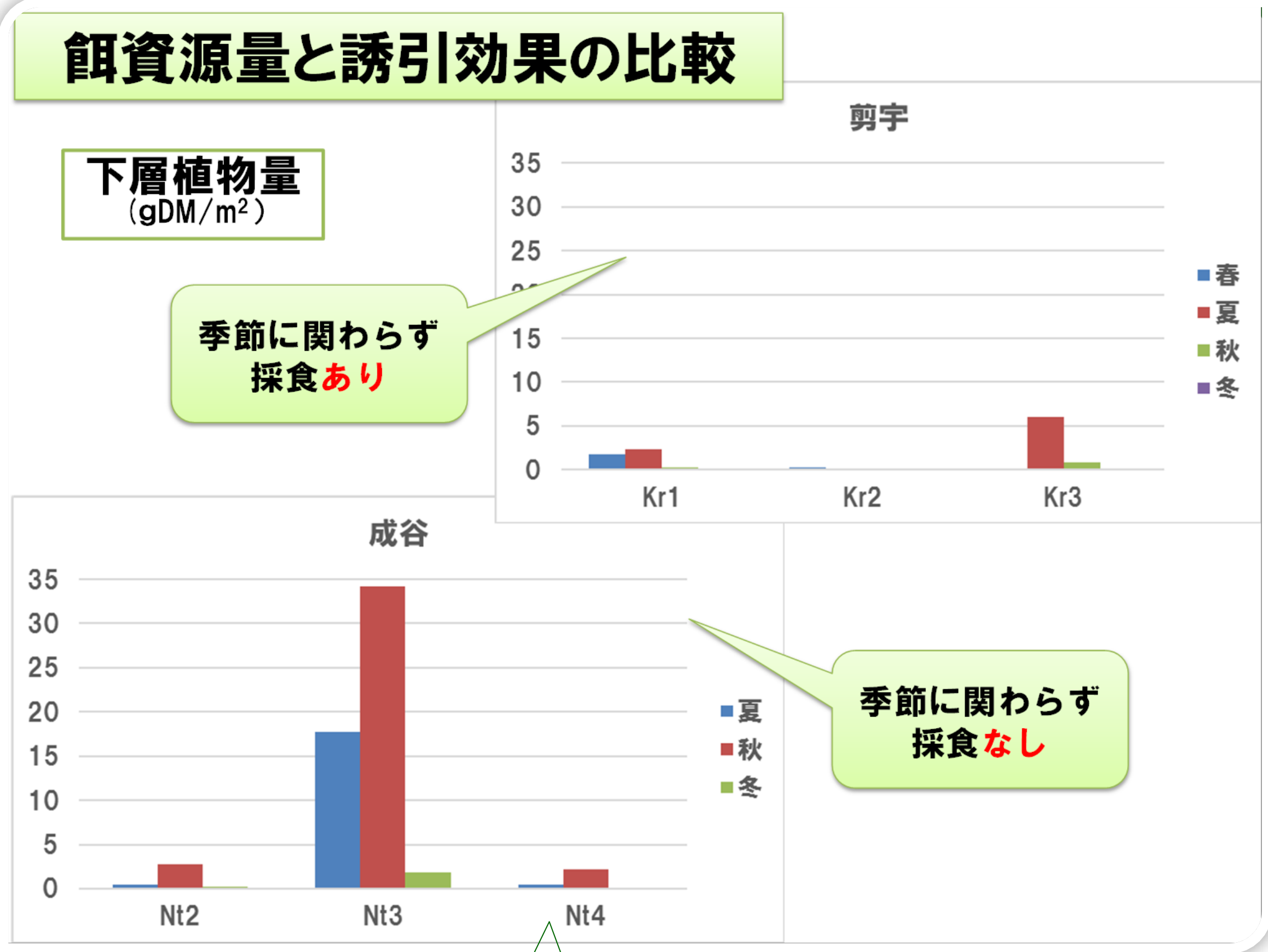
(1)広域的な場所の選定 誘引できるシカ生息密度

シカ密度と誘引効果との関連



シカ生息密度が10頭/km²以上の場合、ヘイキューブの残食率は0%、シカの撮影回数も高くなる傾向にあった

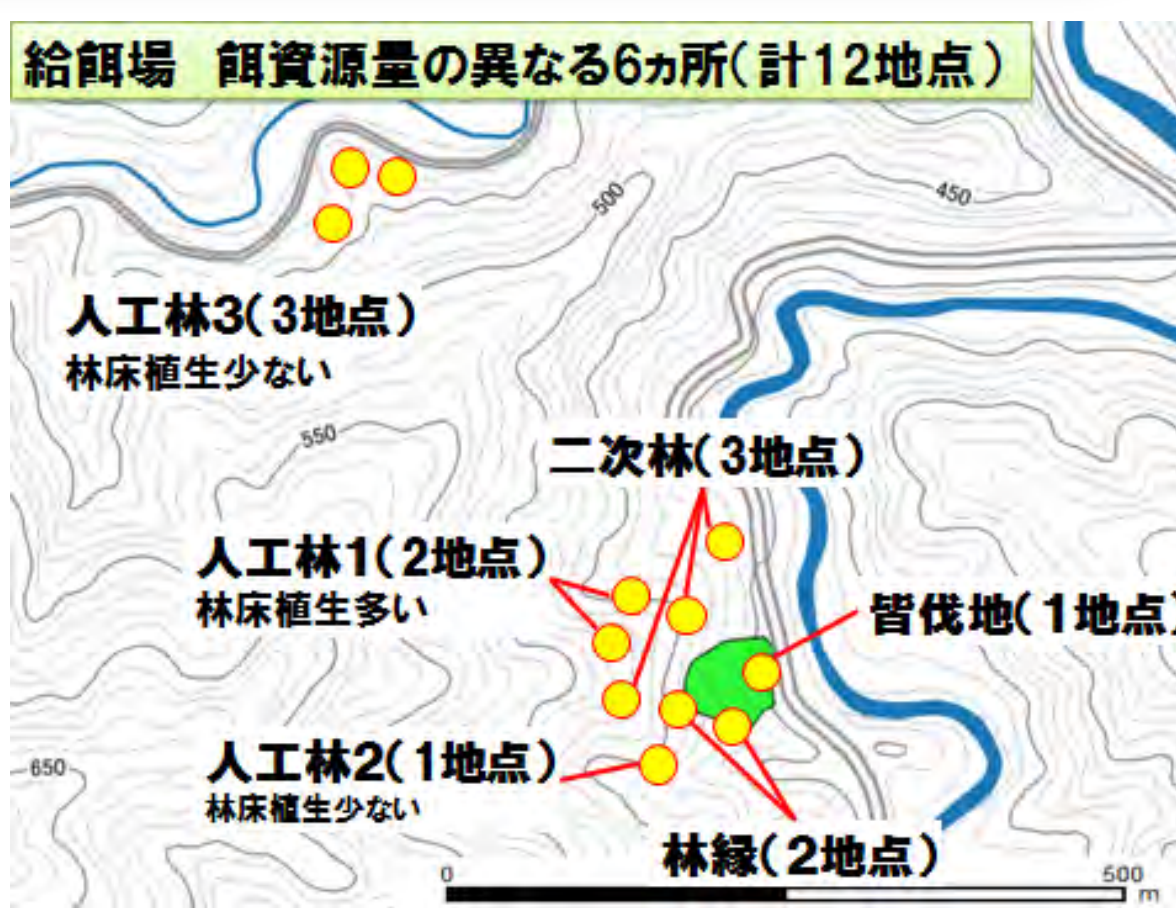
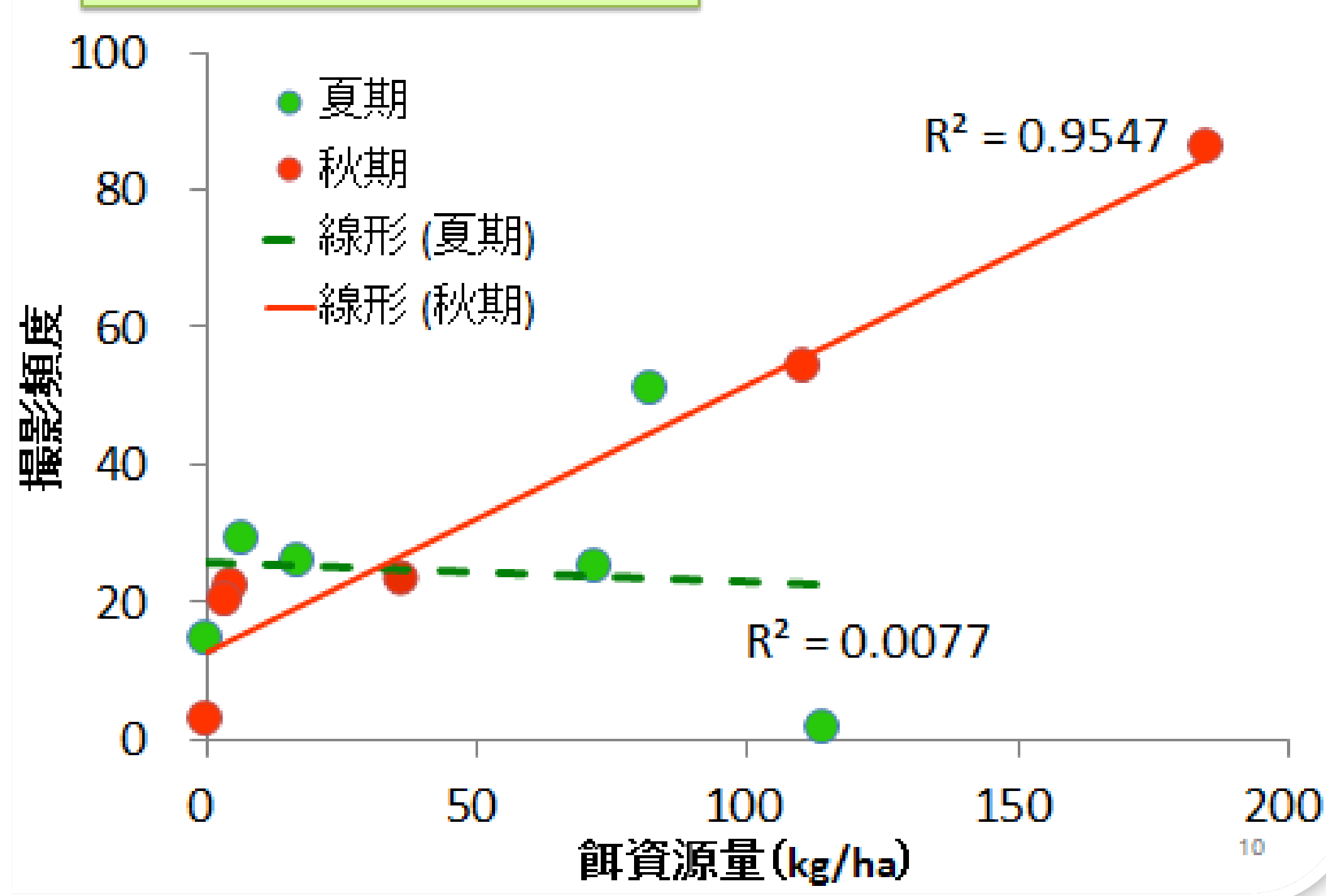
(2)誘引できる餌資源量の評価 場所および季節の絞り込み



伐採地周辺の餌資源量が少ない場合に、季節に関わらず採食が確認された

(3)誘引できる給餌場の選定 植生による絞り込み

餌資源量と撮影頻度



撮影回数は、秋に餌資源量が多いほど多くなり、伐採地および林縁で多い傾向がみられた

給餌場選定 誘引捕獲実施

八代田千鶴(森林総研関西), 酒井 敦(森林総研四国), 後藤将太(高知大・現所属:野生鳥獣対策連携センター), 比嘉基紀(高知大), 藤井 栄(徳島県農技セ), 森 一生(徳島県西部県民局)

